

〔資料〕

## 看護基礎教育の臨床実習に関する過去5年間の研究タイプの概観

古都昌子\*

A SURVEY OF CLINICAL PRACTICE OF BASIC NURSING EDUCATION  
: LITERATURE REVIEW OVER THE LAST FIVE YEARS

Masako FURUICHI \*

キーワード：看護基礎教育、臨床実習、看護学生、文献検討

Key words : basic nursing education, clinical practice, nursing student, literature review

## I. はじめに

看護基礎教育において臨床実習は、既習の知識・技術・態度を統合して看護を実践していくプロセスを学ぶ重要な科目であり、看護実践能力をダイナミックな臨床で培い、実践としての看護学を学ぶとともに専門職業人としての資質を培う場となる。看護基礎教育を受ける学生（学生とする）は、臨床実習で多様な状況に直面しながら育っていく経過をたどり、臨床実習を効果的に展開できるか否かは、その後の進む道に大きな影響を与える。

看護基礎教育の質の向上を目指した検討は、厚生労働省、文部科学省の主催で開催されてきた数々の検討会（厚生労働省,2003,2007,2008,2011）（文部科学省,2003,2011）などにおいて、繰り返しなされてきた。「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」（2011）では、「効果的な臨床実習の方法」について言及されている。その主な内容は、①到達目標を達成できるようにするため、確実に体験できるように調整し、振り返りを充実させること、②自律的な学習の推進に向けてその学生の状況に合わせた関わり方をすること、③実践と思考が連動できるように、事前準備や実習中あるいは実習後に振り返りを行ったり、演習などを設定すること、④一つの実習場で時間をかけて到達目標に達するように実習を編成すること、⑤IT設備や図書館などの学習環境を整えることなどがあがっている。従来の領域別の実習にこだわらない弾力的な実習運営などにも触れられているが、領域別に専門分化した大学教育では困

難も伴うのではないかと予測される。

臨床実習の充実を目指す中、日本の看護教育の現状を見渡すと、現在、看護師養成機関には、大学、短期大学（3年課程）、看護師養成所（専修学校3年課程と2年課程）、5年一貫校などが混在し、多様なカリキュラムが繰り広げられている。看護系大学は急速に増加し、「大学化」への動きがある。大学教育を主流に、一本化へという論議も動く中で、看護師保健師助産師法の一部改正（2009、第21条）により、看護師国家試験受験資格に「大学教育を受けた者」が加えられた。医学書院看護学校便覧2009および2011看護協会調べでは、看護系大学は、1983年に6校、1995年には38校、2000年には82校、2005年には128校、近年は、毎年10校程度ずつ増加し、2011年には200校にのぼる。

一方では、医学書院看護学校便覧（2009）では、看護師養成所の3年課程養成所は1983年に366校、2000年には502校、その後、やや減少はしたものの2009年には484校となり、看護師養成の大半を担う状況には変わらない。短期大学や看護師養成所の2年課程は減少してはいるが、卒業生数としては3年課程、2年課程を合わせて3万人以上を輩出しており、看護師養成の主翼を担っている。

このように、看護基礎教育は、「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」を一律の規準としながらも多様な展開をしている。臨床実習において、看護学生の学び、学びを効果的にするための要因、指導の効果の検証などについて研究は数多くなされている。しかし、前述した看護基礎教育の現状から、カリキュラムの特徴や、

\*東京女子医科大学大学院看護学研究科博士後期課程（Tokyo Women's Medical University, Graduate School of Nursing）

臨床実習の状況は多岐にわたり、研究タイプも多様であると考えられる。

そこで、我が国における看護基礎教育の臨床実習に関連した研究タイプを概観し、今後、臨床実習の充実に向けての研究を進めるための示唆を得ることとした。

## Ⅱ. 臨床実習に関する文献検討を行った先行研究

文献検討を行った先行研究では、臨床実習全般を対象とした文献検討は、山下ら（2003）によって「看護学実習に関する研究内容の分析」として1994年～1998年に看護系学会誌5誌に掲載された434文献から232件を対象になされている。看護教育学の視点からの質的検討により、〔Ⅰ. 実習が学生に及ぼす影響〕〔Ⅱ. 実習における学生の学習活動展開状況〕〔Ⅲ. 実習目標達成度とそれにかかわる要因〕〔Ⅳ. 実習指導に対する学生の期待・評価〕〔Ⅴ. 実習が学生に及ぼす影響と実習目標達成度の教育課程別比較〕のカテゴリーを抽出している。そして、実習に影響する可能性のある変数の抽出や教授活動の質の向上に向けた研究の必要性および大学化を推進する研究の必要性について言及している。小田（2006）は臨床実習における学生の経験について1995年～2005年の文献をレビューし、10文献に絞り込んだ検討をしている。10年間の397文献のうち、一つの領域や場面に限定した上で、具体的に学生の経験や体験を捉え、実習指導教育への示唆を得ようとする傾向があるとしている。金城（2011）は、看護技術教育に視点をあて、2001年から2009年の文献をレビューしているが、臨床実習のみに視点をあてた研究ではない。

臨床実習に関する文献検討を行った先行研究としては、大学教育の視点からの分析が主であり、学生総数の3分の2を占める看護師養成所における研究など、多様なカリキュラムを包括した視点での研究は見られない。そこで、看護系大学、養成所などすべての養成機関における研究を対象に過去5年間の研究タイプを分類することとした。

## Ⅲ. 研究目的

看護基礎教育の臨床実習に関連した過去5年間の研究タイプを概観することで、今後、臨床実習に関する研究を進めるにあたっての示唆を得る。

## Ⅳ. 研究方法

### 1. 対象文献

対象文献は、検索データベース医学中央雑誌のWeb版 Ver.5を用いて看護における学術論文を検索した。検索対象となる期間は、2006年～2010年の過去5年間で「看護学生」「臨床実習」をkeywordとして検索し、3771文献が検索された。さらに原著論文のみ、抄録ありに絞り込み、1038文献が抽出された。それらの文献について、明らかに看護基礎教育の臨床実習について該当しないと判断した論文を除外し、991文献を対象となる文献とした。

### 2. 対象文献の分析方法

対象となる文献について、「研究年度」「研究者の所属機関」「掲載雑誌の分類」「テーマとなる研究領域」「研究データとなる対象」「データ収集方法」「研究テーマ」「論文要旨」「シソーラス」について一覧とし、論文要旨を読みこみながら研究タイプを分類し、全体像を概観した。

## Ⅴ. 結果

### 1. 研究年度〔図1〕

991文献のうち、2006年度が138文献、2007年度が226文献、2008年度が232文献、2009年度が222文献、2010年度が168文献であった。

### 2. 研究者の所属機関〔図2〕

991文献のうち、「大学教員」による研究が440文献と多く、「短期大学教員」が214文献、「看護学校教員」が198文献、「病院の看護部所属の看護職（実習指導担当者など）」が64文献、「大学院研究科の所属」が43文献、「高等学校（5年一貫校など）教員」が4文献、「実践センター、研究所など」が28文献であった。

傾向として大学教員は、当該領域の研究として1人あるいは3名程度での研究グループが多く、看護学校教員は、業務の特性上か、領域を超えて学校全体で5人～7人などの共同研究への取り組みが多かった。

### 3. 掲載雑誌の分類〔図3〕

研究論文が掲載されているのは、「大学紀要、大学ジャーナルなど」が223文献、「短期大学紀要」が157文献、「看護学校紀要」が88文献、「学会誌」が117文献、「学会論文集」が117文献、「雑誌」が176文献、「研究集録」

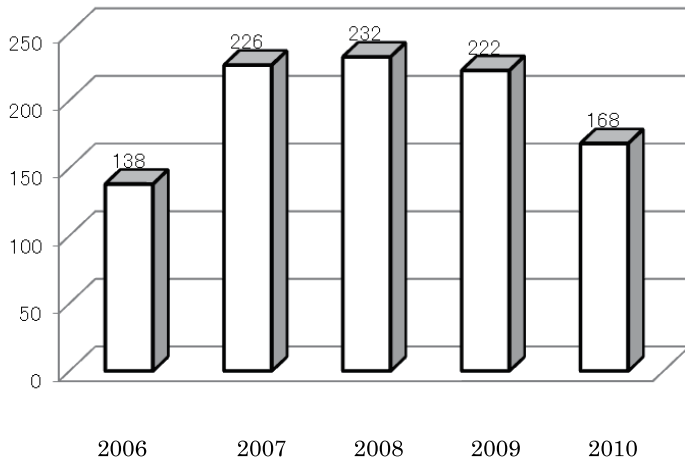


図1：年度ごとの文献数の推移 (N=991)

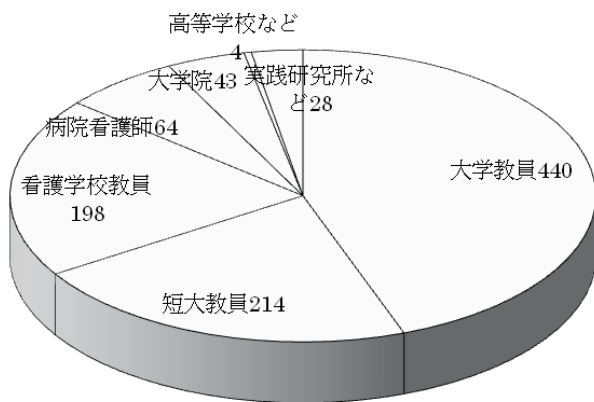


図2：研究者の所属機関 (N=991)

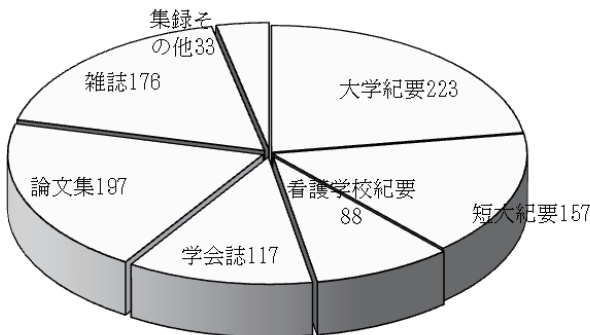


図3：掲載雑誌の分類 (N=991)

が33文献であった。

所属の大学、短期大学、看護学校紀要に掲載する傾向はあるが、所属する学会誌や看護系雑誌への投稿による掲載もみられた。

#### 4. テーマとなる研究領域 [図4]

991文献について看護学実習のどの領域でなされた研

究かを分類した。「基礎看護学実習」が127文献、「成人看護学実習」が144文献、「老年看護学実習」が71文献、「母性(助産)看護学実習」が71文献、「小児看護学実習」が84文献、「精神看護学実習」が109文献、「地域看護学・在宅看護論実習」が74文献、「実習指導」に関するものが71文献、「統合看護、キャリア形成」に関するものが21文献、その他、実習科目全般に共通した内容である「実習科目全般」が205文献であった。

「その他」は分類が不可能な内容として14文献であった。「実習科目全般」の205文献をさらに分類すると「医療安全」(感染管理などを含む)が43文献、「看護倫理」が30文献、「コミュニケーション」に関するものが11文献で多くみられた。

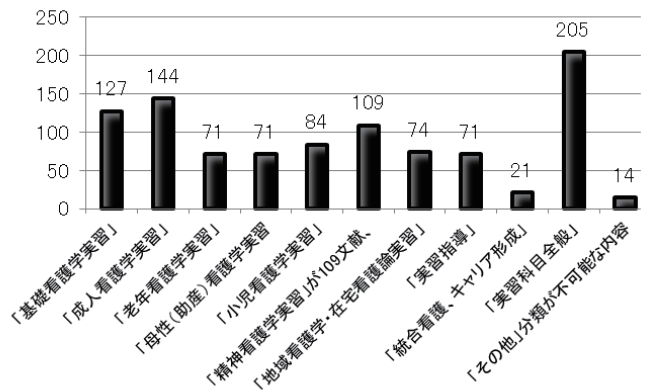


図4： テーマとなる領域ごとの文献 (N=991)

#### 5. 研究データとなる対象 [図5]

研究データとして用いた内容について①「看護学生」②「実習指導者」③「看護教員」④「患者・患者家族」⑤「看護学生と指導者」⑥「その他：幾つかのデータを対象とする」⑦「文献検討」⑧「データ対象が特定できない」に分類した。

①「看護学生」を研究対象としたのは、991文献のうち856文献が該当し、大半の研究は学生を対象として行われていた。その内、「看護学生の経験」「看護学生の意識、認識」「学びの現状、実態」「実習の意義、効果」「実習の影響要因」「実習前後の変化」など、実習目標との関連からと考えられる文献は、圧倒的に多く、856文献のうち、799文献が該当した。また、何らかの教育的介入を行ってその効果を判断するための研究も見られた。その他の57文献において、看護学生の「困難感」「自己効力感」「満足感、達成感」「思い」「不安」「ストレス・コーピング」などについて分析がなされていた。

- ②「実習指導者」を研究対象としたのは、39 文献であった。実習指導者や実習指導を受ける施設の管理者、スタッフから見た「看護学生の学習の現状、実態」「看護学生の学習課題」「指導者の関わりの実際」「指導上の問題点」など、実習指導者の目線から看護学生の学習状況をとらえようとし、実習指導の質を分析し、指導内容、指導方法などへの示唆を得ることを目的に取り組みされていた。
- ③「看護教員」を研究対象としたのは、10 文献であった。看護教員が実習指導の経験に基づき、「学生に学んでほしい内容」を抽出したり、「実習で気になる場面」「実習のトラブル」など、指導場面を具体的に再構成したり、指導の振り返りを行うことで学生の現状を分析し、教員としての指導を分析する取り組みなどがなされていた。
- ④「患者・家族」を研究対象としたのは、7 文献であり、臨床実習で看護学生の受け持ち患者となった患者および患者家族の「意識」「意向」「思いの変化」などについて分析がなされていた。
- ⑤「看護学生と指導者」、⑥「その他：幾つかのデータを対象とする」を合わせると 50 文献であった。看護学生、実習指導者、看護教員についてそれぞれの対象のデータを比較検討したり、それぞれのデータを合わせて場면을構成する等の方法が取られていた。
- ⑦「文献検討」では、7つの文献が該当した。実習科目を限定してその学びについて文献検討を5年～15年（一部は不明）で検索がなされていた。臨床実習を概観した研究は、前述した研究（山下 2003, 小田 2006）以外は見られなかった。

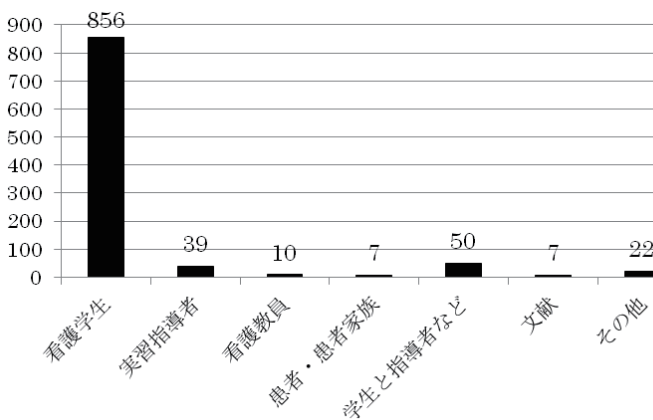


図5：データ収集の対象 (N=991)

## 6. データ収集方法 [図6]

991 文献のうち、質問紙や既存の尺度などを用いた自記式アンケートを用いた研究は、471 文献と約半数を占めている。また、看護学生を対象とした 856 文献のうち、427 文献は、自記式アンケート調査、309 文献は実習記録の記述やレポートなどからの質的分析であった。看護学生へのインタビュー（グループ・インタビューを含む）は 64 文献、その他、場면을再構成して分析するなどの方法が 35 文献、実習場面での参加観察は 3 文献であった。

実習指導者、看護教員を対象とした場合にも、同様に自記式質問紙、指導レポート、インタビューの順に多い傾向が見られた。

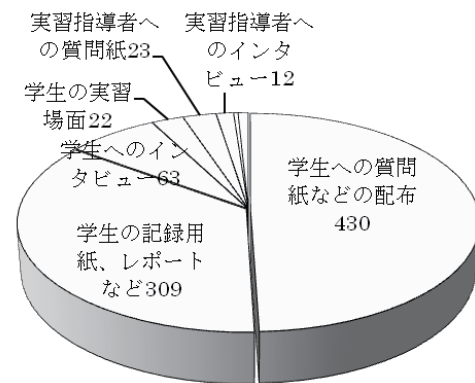


図6：主なデータ収集方法 (N=869)

## VI. 考察

今回、過去5年間の991文献を対象として研究タイプを分類した結果、看護学実習の現状を把握し、臨地実習に取り組む看護学生の理解に努めながら、実習目標達成に向けて多くの研究に取り組まれていた。山下らの研究（2003）によると1994年から1998年の5年間で主要な看護系雑誌に掲載された「看護学実習」に関する研究は434件と報告されている。今回の結果からは、看護系大学教員、養成所教員、臨床実習指導者など、それぞれの立場から教育の充実を期待し、研究に取り組まれている現状が確認できた。2010年度に若干の減少傾向がみられたのはカリキュラム改正などの過渡期の影響があることも予測される。今後、看護系大学、看護系大学院の増加に伴い、研究への取り組みはさらに精力的に行われていくものと考えられる。

多くの文献の研究タイプを分類する中で、実習科目ごとの具体的な研究が進められていることが把握できた。大学教員の領域ごとの研究が多く、専門領域での

取り組みが系統的に行われており、その傾向は、今後、大学化が進む中でさらに顕著になると予測される。小田（2003）は、「特定領域における研究や事例検討のような形で一人の学生の看護場面や指導場面を取り上げるような形で非常に多く研究されていた」「臨地実習における学生の経験・体験を全体的に捉えた上で明記している研究は少ない」として学生の経験を部分的に捉えて、実習指導への示唆を得ようとする傾向について言及しており、今回の結果において同様の傾向がみられた。

また、領域ごとに分類できない「実習科目全般」の205文献を分類すると、各領域の実践の基盤となる基本技術としての「医療安全」（感染管理などを含む）、「看護倫理」、「コミュニケーション」の研究が多く見られた。検討会報告においても看護基礎教育で充実を求められている内容であり、ダイナミックな臨床での患者とのかかわりにおいてこそ学べる機会を持ち、学生が経験するそれぞれの実習において、継続的に縦断的にその学習のあり方を模索する必要性があると言える。

領域ごとに分類できない学生理解をねらいとした研究では、「困難感」「自己効力感」「満足感、達成感」「思い」「不安」「ストレス・コーピング」などについて分析がなされていた。大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会報告（文部科学省、2011）においても、医療人としての職業倫理や職業アイデンティティの醸成が課題と述べられている。青年期を生き、看護職としてのアイデンティティを形成していく途上である多感な看護学生が、初学者として臨床に居合わせることで学生の内的反応、人間的な反応に着眼し、取り組まれている文献も見られ、さらに学生理解を深めながら取り組む必要性があると考えられる。

また、データ収集方法は、今まで自記式質問紙調査からインタビューが主流であったのが、実習場面の参加観察なども見られるようになっていた。教育者がそのまま研究者としてデータ収集する場合などは、学生の立場からは、研究協力をせざるを得ない実態が予想される。学生は、評価を意識してデータに何らかのバイアスが生じ、データの信憑性が得られにくくなることも考えられる。そのため、看護学生を対象とした研究では、研究者は、学習者として評価を受ける立場の看護学生の自由意志を守り、学習上の不利益をもたらさないように倫理的責任を問われ、データ収集への制約を伴う。しかし、倫理的責任を意識するあまりにデータを収集できにくくなり、意味ある研究が困難となることも生じ得る。臨床実習で学生に何が起きている

かをより現実的に把握するには、学生が真実を記述したり、語ったり、ありのままの実習の現実を示すことで学習上の不利益を生じないように、学生を守る配慮が第一義と言える。その上で、臨床実習の向上に向けての研究協力者として、真の理解と承諾を得ることが重要である。今後は、データ収集の方法論として、記載を求められたレポートや質問紙のみならず、タイムリーなインタビューや参加観察なども取り入れ、臨床実習において学生の現実を示す生のデータに近づくための方法の検討も不可欠であると考えられる。

高田（2006）は、臨床実習の意義について、「とりわけ医学や看護学生の教育においては実習は欠くことができないにもかかわらず、臨床実習の教育的意味ないし方法は明らかにされていない。検討はされてもそれは側面を見るに止まっている」と言及する。臨床実習の充実につながる研究を進めていくには、臨床実習の全体を俯瞰する研究を進めることも必要ではないかと考える。

今後、領域における系統的な研究とともに、臨床実習を包括的に捉え、学生理解を深めながら、学生の育ちに応じた継続的、縦断的な視野の広い研究、臨床実習の現実を捉え、その方向性に示唆を与える研究が必要であると考えられる。

#### 引用文献

- 医学書院 SP 課編（2010）：看護学校便覧 2010, 医学書院, 東京.
- 金城忍（2011）：看護基礎教育における看護技術教育に関する研究の動向 -2001 年から 2009 年に発表された研究論文の分析を通して-, 沖縄県立看護大学紀要第 12 号, 104-112.
- 厚生労働省医政局（2003）：看護基礎教育の看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書.
- 厚生労働省医政局（2007）：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.
- 厚生労働省医政局（2008）：看護基礎教育のあり方に関する懇談会論点整理.
- 厚生労働省医政局（2011）：看護基礎教育の内容と方法に関する検討会報告書.
- 文部科学省高等教育局医学教育課（2003）：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて.
- 文部科学省高等教育局医学教育課（2011）：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告.

- 小田亜希子 (2006) : 神奈川県立保健福祉大学実践教育  
センター看護教育研究集録, NO31.69-76.
- 高田熱美 (2006) : 看護教育－臨床実習の意義－, 福岡  
大学人文論叢, 第 38 巻第 2 号, 435-452.
- 山下暢子, 定廣和香子, 舟島なをみ (2003) : 1994 年か  
ら 1998 年における看護学実習に関する研究内容の  
分析, 一学生を対象とした研究に焦点をあてて一,  
看護教育学研究, VOL12, No1, 29-36.